

## 審査の結果の要旨

氏名 佐久間 亜紀

本研究は、19世紀初頭、中葉、後半における女性の教師教育者の思想と実践の分析をとおして、アメリカにおける教職の女性化と専門職化の錯綜する展開を探究している。研究対象とされた女性は、エマ・ウィラード、キャサリン・ビーチャー、メアリー・ライアン、イレクタ・ウォルトン、アニー・ジョンソン、エレン・ハイド、ジュリア・キングの7人である。本研究は、彼女らの個人史を集約的に研究し、アメリカの教師の女性化が促進された歴史的事実と、女性化により規制された教職の専門職性の特質を描出している。この主題の追究において本研究は、従来の史資料に加え、未刊行の自筆原稿、手紙、日記、日誌の資料を発掘し渉猟して、先行研究よりも実証的で精緻な考察を行っている。

本研究は、本論3部10章と序章と終章で構成されている。序章では、アメリカ教師教育史、高等教育史、教職史に関する先行研究を女性史の視点で検証している。第1部では女性セミナリーにおける女性教師像を主題化し、19世紀初頭の男性中心の教職像（第1章）を検討した後、学問教養の教育を重視し「共和国の母」としての女性教師像を提唱したウィラード（第2章）、男性は公的役割、女性は家庭的役割という性的役割分業を容認した上で「女性の真の専門職」として教職を定位したビーチャー（第3章）、自己犠牲的に神に献身する「聖職者」としての女性教師像を提示し、教職の専門職化には批判的であったライアン（第4章）の思想と実践を分析している。これら黎明期の女性の教師教育者たちが学問的教養を備えた専門職としての教師像を模索しつつ、もう一方でその教師像がジェンダー規範によって女性化され脱専門職化されるという矛盾に充ちた歴史的過程が描き出されている。

第2部は州立師範学校の成立期を扱い、まず、州立師範学校が女性を主対象に成立していく過程を考察している（第5章）。そして、優秀な教師教育者でありながら男性教師の補助教師に甘んじざるをえなかったウォルトンの教職生活の葛藤が叙述され（第6章）、19世紀半ばの女性教師の手紙や日記などの初出史料を解釈して東部諸州の女性教師の日常世界を描出し、今日に続く女性教師の心性の源流が探られている（第7章）。

第3部は州立師範学校発展期における女性管理職の思想と実践を考察している。州立師範学校の普及によって女性の教育機会が拡大し（第8章）、東部の州立師範学校においては女性校長も出現する。本研究では、全米で最初の師範学校長となったジョンソン、およびその校長職を継承して教師教育を専門家教育へと導いたハイドの教師教育カリキュラムの改革の実践とその思想を分析している（第9章）。続いて中西部のミシガン州立師範学校の管理職をつとめたキングの民主的市民の形成を実現する教師教育が考察され、学識を基礎とする教職の専門職化への志向が見出されている（第10章）。

本研究は、19世紀アメリカの教師教育における教職の女性化とその女性化による教職の専門職化と脱専門職化の複合的で葛藤をはらんだ歴史的構造を精緻な個人史研究によって探究している点で秀逸であり、教職の専門職性を認識するうえで優れた学術的貢献を達成している。よって本論文は博士（教育学）の水準に十分に達しているものと評価された。